

てんかんとその境界領域

鑑別診断のためのガイドブック

Markus Reuber, Steven Schachter【編】

吉野 相英【監訳】

評者

兼本 浩祐

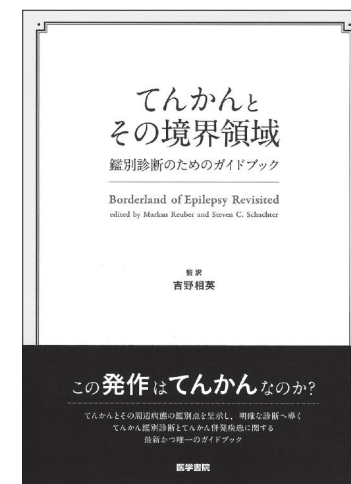
愛知医科大学教授・精神科学

どのような分野であれ、その分野についてよく知るには、その分野の境界に位置する対象を知る必要がある。そうでなくては結局は自身に取り組むべき対象の輪郭を鮮明には理解できないからである。そういう意味では臨床てんかん学を志す者にとって、てんかんと同様にてんかんとてんかんではない病態の境界に位置するさまざまな病態を知ること、まさにてんかんとは何かを知るためには必須であると言える。

本書の内容は極めて多岐にわたっていて、てんかん類似症状としては、失神、心因性発作、パニック発作、めまい、小児の非てんかん性発作エピソードが、てんかんとその境界に位置する疾患群としては片頭痛、一過性脳虚血発作、一過性全健忘、パラソムニアが、てんかん関連症状としてはミオクロヌス、チック、発作性ジスキネジア、てんかん発作の前駆症状が、特異なてんかんの原因としては、自己免疫介在性てんかん、自閉症が、てんかん専門医でなければてんかんとは考えないかもしれない特殊なてんかん症候群として、非けいれん性てんかん発作重積状態、てんかん性脳症が、てんか

んに由来する精神症状として発作性爆発、てんかん発作の前駆症状、抑うつ、精神病、パーソナリティ障害が取り上げられている。てんかんのようには見えててんかんではない、てんかんのようには見えないがてんかんと深く関連するという実践的なてんかん治療において常に問題となる病態が多岐にわたり博物学的に取り上げられていて、その多彩なにぎにぎしさは、さながらアジアの夜市の出店のようなわくわく感があるが、実際にはその1つ1つの専門性の高さを考えれば、むしろ東急ハンズの売り場のほうに近いのかもしれない。

原本の編者の1人、マルクス・ロイバーは現在ヨーロッパてんかん学会の機関誌である『Seizure』の編集委員長であり、もう1人ステイーブン・シャハターは、精神症状や社会状況も含めててんかんを包括的に取り扱おうという趣旨の雑誌である『Epilepsy & Behavior』の編集委員長で、いずれもてんかん診療における境界領域と呼ばれている領域が、少なくとも臨床においては、中核領域と勝るとも劣らない重要性を持つことを熟知している人たちである。付け加えていうならば両者とも懐の深い編集



方針を貫いていて、日は当たらないが重要な多くのトピックに関する論文を積極的に受理している。本書には先日亡くなったディーター・ヤンツの序文も添えられている。そこには私を含めヤンツに師事したすべてのヤンツ・シューラー(弟子)の心に刻まれている教え、そしててんかんにおいてもてんかんの辺縁領域においても、最初に掲げられるべき指針が書かれている。「患者の訴えに注意深く耳を傾けることによって得られる情報にまさるものはない」という言葉がそれである(「序」より)。

本書は、てんかんに興味を持ち、とりあえずの診断ができるようになった後で、自らの臨床力を次のステップへ進めようと思う人には必須の本であるとともに、専門家が自らの知識を更新するにも欠かせない項目が多数含まれており、てんかん学を志す人には必携の1冊と言える。

B5・頁 344

2017 年 6 月

定価：本体 10,000 円＋税

[ISBN978-4-260-03023-6]

医学書院刊